

詩を通じて見たる杜甫の伝記

—— 第二放蕩時代 ——

児 玉 六 郎
Rokuro KODAMA

—— 其 の 四 ——

本篇は鹿児島大学教育学部教育研究所発行の「研究紀要第五巻」に掲載された「詩を通じて見たる杜甫の伝記」に次ぐものとして、第四篇を為すものである。年令的に言えば、杜甫三十歳より三十九歳に至る間の生活ぶりを敘する。

—— 第二放蕩時代 ——

開元二十九年八月、安祿山は營州都督と為り、十二月吐蕃は石堡城を陥落させた。

このころ杜甫は東都洛陽に在り正に三十歳、此の頃の作詩として「己上人の茅齋」「宋員外之問が旧苑に過る」有り、中でも「夜左氏荘に宴す」の詩は河南の夜景を敘して巧みである。

暗水流花径 暗き水は花の径を流れ
春星帯草堂 春の星は草堂を^{ともな}う

と述べ、「房兵曹の胡馬」を見ては、前半に馬の骨相を、後半で性情を敘し、王西樵をして「警句」なりと言わしめた。

胡馬大宛名	胡の馬は大宛の名にしおいて
鋒稜瘦骨成	鋒あり稜ありて瘦せたる骨の ^{まつ} 成たし
竹批雙耳峻	竹の ^そ 批ぎたるがごとく ^{ふた} 雙つの耳は ^{そはだ} 峻ち
風入四蹄輕	風は入りて四つの蹄の輕ろし

かかる趣向の同じあらわれとして「画ける鷹」の作詩あり、これを少陵新譜は「画に因つて真に迫り出語雄大なり」と評している。

「臨邑の舎弟の書至る苦雨あり黄河泛溢し堤防の患簿領の憂うる所なりという因つて此の詩を寄せ用いて其の意を寛にす」の詩も此の頃の作である。

明けて天宝元年(742)正月、安祿山は平盧節度使に任命、二月官名改称、三月深險の李林甫は相に補された。このことを資治通鑑では、

「天宝元年春正月丁未朔、勤政楼に御し朝賀を受く。天下に赦し改元す、壬子、平盧を分ちて別に節度となし安祿山を以て節度使と為す。……壬辰、群臣上表して以はく、『函谷の靈府潜かに年号を応ず。天に先ちて違わず。請う尊号に於て天宝の字を加えん』と。之と従う。……李林甫相と為り凡そ才望功業、己の右に出で、及び上の厚くする所となり勢位將に己に逼らんとする者は必ず百計して之を去る。尤も文学の士を忌む。或は陽に之を善くし啗わずに甘言を以てし而して陰に之を

陥る。世、李林甫を謂う『口に蜜あり腹に劍あり』と。……上又嘗つて林甫に問うて曰く『嚴挺之、今安くに在りや是人亦用う可し』と。挺之時に絳州の刺史たり。林甫退き挺之の弟、損之を召し諭して以わく、『上尊兄を待つ意甚だ厚し、盍んぞ上に見ゆるの策を為さざる。奏して風疾と称し京師に還りて医に就く事を求めよ』と。挺之に従う。林甫其の奏を以て上に白して曰く『挺之衰老し風疾を得たり。宜しく且く授くるに散秩を以てし医薬に便ならしむべし』と。上歎吒すること久しくす』と。

鏡詮の杜工部年譜に「是年公の姑万年君、仁風里に卒し六月嬪を河南県に還し公は墓銘を作る」と記しているが杜甫は此年に龍門に再遊し「龍門」「李監の宅二首」を作り招宴の奢侈であつたことを歌っているが、李は何人なるか明らかでない。

天宝二年正月、安祿山入朝、帝の寵待甚だ厚く謁見に時無き状態であつたといわれる。

天宝三載二月、安祿山は范陽節度使に任命、是年より年を改めて載という。杜工部年譜には、「是年五月祖母范陽夫人は陳晋の私第に卒し八月僊師に歸葬し、甫は墓銘を作る」旨記述している。

杜甫が李白、高適と交際を結んだのも此の頃であつた。即ち天宝三載、杜甫三十三歳の時、李白は翰林より放たれ、又高適にも会し梁宋齊魯に遊んだ。彼等が壮年血氣の勇を以て酒を飲み詩を賦し時あつては狩獵を為した有様は晩年の作詩「昔遊」「遺懷」によつて分るが前者のみ提起してみると、

昔者与高李	昔は高と季と
晚登单父台	晩 <small>ゆうべ</small> に单父の台に登りぬ
寒蕪際碣石	寒 <small>はら</small> き蕪 <small>ついな</small> は碣石に際り
万里風雲来	万里より風雲の来る
桑柘葉如雨	桑柘の葉は雨の如く
飛藿去徘徊	飛べる <small>あかさ</small> 藿は去りなんとして徘徊す
清霜大沢凍	清き霜に大沢は凍り
禽獸有余哀	禽獸も余哀ありき

彼等の交遊ぶりは李白に「秋孟諸に獵して夜歸り酒を单父の東樓に置きて妓を觀る」の詩あり、高適には「宓公瑟台三首」や「群公と同じく秋に瑟台に登るの作」及び「群公と同じく海上に出獵するの作」がある。李白にして杜甫からの作詩を見ると、「李白に贈る」(天宝三載作)「李白に贈る」(李白十二白と同じく范十が隱居を尋ぬ)「冬の日李白を懷う」(天宝四載作)、「春日李白を懷う」(孔巢父が病と謝して歸り江東に遊ぶを送り兼ねて李白に呈す)(天宝五載作)、「飲中八仙歌」(天宝七載作)がある。高適に送つた作詩は、「蔡希魯都尉が隴右に還るを送り因つて高三十五書記に寄す」(天宝十四載作)、「高三十五詹事に寄す」(乾元々年作)、「彭州の高三十五適に寄す」(乾元三年作)等外に数種を数えている。

筆に元に戻せば、李白との交遊の始め頃、「重ねて鄭氏の東亭に題す」として新安県の鄭某氏の東亭を歌い、天宝四載作「李北海に陪して歴下の亭に宴す」の李北海は李邕時に北海の太守となり故

に李北海と称していたからである。「李太守が歴下の古城の員外の新亭に宿るに同す」の李太守も李邕である。「暫く臨邑に如かんとして惜山の湖亭に至り李員外を懐い奉り率爾興を成す」の詩は弟の任地たる臨邑に行かんとしてのである。同じ頃の作詩「鄭駙が宅にて洞中に宴す」「特進汝陽王に贈る二十二韻」もよいが特に「今夕行」の歌は壮年の豪気を叙して極まり無い。

君莫笑劉毅從來布衣願 君笑うこと莫かれ劉毅從來布衣の願い
 家無儋石輸百萬 家に儋石無きも百萬を輸す

天寶五載(746)、杜工部年譜に依れば杜甫は三十五歳の時、長安に帰つたことが分る。之より天寶十三載(754)迄の九年間此処に居たが、其の間、天寶六載(747)には天子の詔に応じたけれども落第した。即ち朱鶴齡編譜に「天寶六載丁亥、公詔に応ずるも退下し長安に留まる」と。唐書李林甫伝には「天寶六載、帝、天下に詔して一芸以上に通ずる者は皆京師に詣でしむ。林甫は対策者を恐れ、言を斥けて其の好を言う。乃ち尙書省に委して試を覆す。遂に一人の及第なし」と。

資治通鑑には更に詳細であるが李林甫は「拳人多くは卑賤愚瞶なり。恐らくは佞言、聖聽を汚濁する有らん」と。かくて杜甫も卑賤愚瞶の烙印を押され、無理に落第させられて退下し困窮した。

天寶七載五月、安祿山は鉄券を賜り、楊貴妃の三姉には韓国夫人、虢国夫人、秦国夫人の称号を賜わり朝廷の奢侈がいよいよ目に余るようになるころ、杜甫は尙書左丞の親族韋濟に窮乏を訴えたのが「河南の韋尹丈人に寄せ奉る」の詩であるが、特に「韋左丞丈に奉贈す二十二韻」は悲壯な決意がうかがわれる。

紈袴不餓死 ^{しろぎぬ} 紈の袴はきたるものは餓えて死なず
 儒冠多誤身 ^{しほしは} 儒の冠は ^{さまた} 多身の誤げなり
 丈人試靜聽 丈人よ試みに靜かに聴きたまえ
 賤子請具陳 ^{おのれ} 賤しき子の請う具さに陳べん

.....
 常擬報一飯 ^{おも} 常に一飯にも報ぜんと擬う
 况懷辭大臣 ^{いとまご} 況んや大臣に ^{こころ} 辭いせんとする懷をや
 白鷗没浩蕩 白鷗の浩蕩に没せば
 万里誰能馴 万里誰か能く馴らしなん

敬愛する韋濟よ。聞き給え。この窮状を。読書万卷、下筆有神の稀才も、事志と反しては、殘杯冷炙の辱めを受け快々として楽しまない。報恩は念ずる所であるからこの苦衷を推察し給わんことを。御選唐宋詩醇はこの詩を評して「神氣索然たるを覺ゆ」と述べている。

「比部の蕭郎中十兄に贈る」の詩では、

中散山陽鍛 中散は山陽の鍛となり
 愚公野谷邨 愚公は野谷の邨となる

と述べ隱者の生活までも考えた。「故武衛將軍の挽詞」「飲中八仙歌」も当時の作である。

天寶八載、高仙芝、安四鎮節度使に任命されていたが、その入朝時、胡産の駿馬を目前に見ては

「高都護の駉馬行」の詩を作り、

与人一心成大功 人と心を一にして大功を成せり

と歌つた。唐宋詩醇に「神駿を写して愛すべし」と評している。更にまた、

青絲絡頭為君老 青き^{つな}絲は頭に^{まど}絡いて君が為に老ゆ

何由卻向橫門道 何に由つてか^{かえ}卻つて^い橫門の道を向でなむ

同年冬に「冬日洛城の北にて玄元皇帝の廟に謁す」の詩を作っているがこれは杜工部年譜にも見える如く、杜甫が長安は在つても間々東都洛陽に至つたことを物語る。

明けて天宝九載五月、安祿山は東平郡王に爵せられ、八月、河北道を兼任し、安祿山入朝するや、楊国忠兄弟姉妹は揃つて往迎した。

時に楊国忠は天子より「国忠」の名を賜わつた。かくて玄宗の治世も衰微に向わんとする頃、安祿山の朝廷での有様は、資治通鑑に依れば次の如くである。

「戊寅、范陽節度使安祿山を以て御史大夫を兼ねしむ。祿山、体充肥にして膾垂れ、膝を過ぐ。嘗嘗つて自ら称して『腹の重さ三百斤なり』と。外は癡直なるが如く、内は実に狡黠なり。常に其將劉駱谷をして京師に留まらせ、朝廷の旨趣を詢い、動靜皆之を報ぜしむ。或は応に牋表有るべき者は駱谷即ち為めに代作して之を通ず。歳ごとに俘虜雜畜奇禽異獸珍玩の物を献じ路に絶えず郡県逋運に疲る。祿山上の前にありては應對敏給にして雑うるに詼諧を以てす。上嘗つて其の腹を指して曰く『此胡、腹中何の有る所にして其の大なること乃ち爾る』と。對えて曰く『更に余物無し。止だ赤心あるのみ』と。上悦ぶ。又嘗つて命じて太子に見えしむ。祿山拱笑して曰く『臣は胡人にして朝儀に習わず、知らず太子とは何の官ぞ』と。上曰く『此れ儲君なり。朕が千秋万歳の後、朕に代りて汝に君たらん者なり』と。祿山曰く『臣愚にして^{さき}臆に惟だ陛下一人有るのみを^{さき}知り乃ち更に儲君有るを知らず』と。己むを得ずして然る後拜す。上以て信に然りと為し益、之を愛す。上嘗つて勤政楼に宴す。百官楼下に列坐す。独り祿山の為めに御座の東間に於て金鷄障を設け、榻を置き前の前に坐せしめ仍お命じて簾を卷かしめ以て榮寵を示す。楊鈺、楊鏄、貴妃の三姉に命じて皆祿山と兄弟を敘せしむ。祿山禁中に出入するを得、因つて請いて貴妃の児となる。上、貴妃と共に坐す。祿山先ず貴妃を拜す。上問うて『何が故ぞ』と。對えて曰く『胡人は母を先にして父を後にす』と。上悦ぶ」と。

安祿山の怡頭は唐朝顛覆の要因となり、天下の治世は漸く乱調となる頃、憂愁を胸に秘めた杜甫は登用されることに依つて微力を尽そうと次第に焦るようになった。

参 考 文 献

- 杜詩鏡銓 楊倫編
- 杜詩詳註 仇兆鰲輯註
- 讀杜心解 浦起龍編
- 杜律集解 邵伝撰
- 分門集註 杜工部詩 王珠編

- 杜詩偶評 沈德潛編
 - 御選唐宋詩醇 乾隆帝選
 - 杜少陵詩集 鈴木虎雄註
 - 杜甫私記 吉川孝次郎著
 - 少陵新譜 李春坪輯
 - 資治通鑑 陳仁錫評閱
 - 支那文学雜考 児島献吉郎著
-